
竹林奇譚 外伝三 想月

すばる & ぴの子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竹林奇譚 外伝三 想月

【Nコード】

N76640

【作者名】

すばる&ぴの子

【あらすじ】

これは竹林に住まう虎がまだ人間だったところのお話——……。彼が人として生きていたころの、切ない物語。

こちらのお話に登場する「虎」について知りたい方は、「外伝一 かけがえなき大切なもの」をお読みくださいませ。

このお話は、すばるの友人おかん又が『竹林奇譚』のために書いてくれたものを、リライトした物になります。

序章

青々とした竹が生い茂る林の中で、小さな湖が、しなる背中ほどに細った月を映し出していた。

竹林を通り抜ける心地よい涼風に、雲隠クシイはす、と目を細める。

「ああ、気持ちがいいですね、月芳」

「そうだな」

軽く尻尾を一振りして、草の上に横たえながら、少し離れたところで声を返すのは、一頭の虎。湖の端に寝そべる姿は、周囲の竹や月と共に、まるで、一幅の水墨画のように湖面に写し取られている。ふと、湖に目をやった雲隠は、そこに映る風景に、そっと息をついて、言葉を口にする。

「で、月芳ユエファン。今日は何をしに？」

応えはない。

「決心でもしましたか…」

「雲隠、二胡をひいてくれないか」

途中で言葉を遮るように、月芳が頼み事を口にした。

雲隠は、じつと月芳を見つめていたが、やがて、一つ小さく息をつくと、「取ってきます」と立ち上がった。

後に残った月芳が、湖の中をのぞき込むのが、歩き出した雲隠の目の端に映った。

第1章1

「ねえ、ウォルバン、いつものお話、してくれる？」

人払いがすんだ静かな部屋の中で、月芳はいつものようにウォルバンにせがんだ。^{ユエファン}

13歳という年齢にしては落ち着いて見える黒目がちの目を笑みの形に緩め、髪が崩れないように振り向こうとする。髪を結い上げていた少年の手の中で、動きにつられてわずかに引つ張られた黒いつややかな髪が、きゅ、ときしんだ。

ウォルバン、と呼ばれて手を止めた少年は、こちらも同じほどの年頃。焼き煉瓦のように日に良く灼けた肌に少し堅そうな癖のある黒い髪、理知的な瞳がとても印象的だ。

「もう何度も話したから、覚えてしまっているだろう？」

苦笑しながら言うウォルバンに、月芳はなおも言いつのる。

「ええ、でも、やっぱり聞きたい。とても悲しくて、とても素敵なお話なんだから」

ウォルバンは知っている。月芳がなぜこんなにもその物語のことがすきなのか。

物語の内容は、月芳の国に伝わるものとほとんど変わらない。

ただ一点…結末が違ふのだ。

どうやら物語の終わりを、月芳は長い間、不満に思っていたらしい。だが、ウォルバンからその物語とは異なる結末を聞いて、そちらのほうがよいとたいそう満足したようなのだ。

「悲しくて優しくて、なんだか、胸にすんと、って、落ちてくるの」目を閉じて、うつとりとそう呟いてうつむいた白いうなじが見えるように、高い位置で結い上げた月芳の髪に、かわいらしい蝶の細工が施された簪を挿してやりながら、「気のせいだよ」と、何に対する否定かわからない言葉をかけて、それでも、ウォルバンは話し始めた。

幾度も、幾十度も、月芳に語って聞かせた、ウォルバンの生まれた国の伝説の、それは、いまからちよつとだけ、昔のお話。

「昔、昔、そう、まだ虎がたばこを吸っていた頃の話」

この不思議な導入の部分は月芳のお気に入りだから、ウォルバンはけして省略しない。

「天の神が治める天上の国は、それはそれは美しく、神々は幸せに暮らしていた。しかし、神の息子は、ある日、下界を眺めながら、父に、言った。

『人の世は、今はまだ、あのような暗闇に覆われていますが、地上にも天上と同じく、光り輝くような美しい国が生まれればどれほどすばらしいことでしょう。』と。

神はこの言葉を聞いて、この息子ファヌンを地上に遣わせた。しばらくすると、ファヌンの元に、同じ洞窟で姉妹のように仲良く暮らす一匹の虎と一匹の熊が訪れ、人になりたいとしきりに願い出た。人にして欲しい、そして、あなたの妻にして欲しい、と。

ファヌンは、彼らに蓬一握りと、大蒜^{おおびる}20個を渡して言った。

『お前たちは人になりたいというが、しかし、人を食うものが人になるというわけにはいかないのだ。さあ、これをやるから、帰って人の代わりにこれを食べ、100日間、太陽の光を浴びずに過ごせば、人になれるだろう。』

2匹は大喜びで洞穴の住居に帰り、その日から、毎日蓬と大蒜を食べて暮らした。

日の光が射してくれば、大きな体を精一杯縮めて二人で洞穴の奥の奥へ隠れ、たった一握りの蓬と大蒜が20個ばかりで膨れぬ腹を抱えて眠れぬ夜をいくつも越した。

100日目、熊は美しい女性の姿を手に入れた。

その顔は、輝く太陽のよう。しなやかな手をそろえてファヌンに大

礼をしたその指先は美しく朱に彩られ、白い肌に良く映えた。ファヌンは熊をヤンヒャンと名付け、自らの妻とした。

ところが、100日を過ぎても、虎は現れない。不思議に思ったファヌンが、ヤンヒャンに尋ねると、ヤンヒャンは、『実は、お腹がすいていて、最後の10日ほどのことは良く覚えていないのです。虎姉と二人、お腹がすいた、お腹がすいたと、唸り、暴れ、外に行つて食べ物を探そうかと幾度も思いながら、さりとて、日の光を浴びることもできないので外に出ることは出来ないまま、朦朧として過ごしてきたのです。』と言う。

さては、約束の日まで辛抱しきれなかったのかと、ファヌンは、虎を見限つて、女性の姿となり今や自分の子どもを身ごもったヤンヒャンと共に人の世を治めるため山を下り、人の国を築き、二人の間に生まれた子が、その初めての王となった」

第1章2

ここまで話すと、ウォルバンの前に、冷たい茶の入った茶器が差し出された。馴れたように蓋をあけ、ゆつくりと中身を飲み干す。桂皮と黒砂糖を煮溶かし、干し柿を浮かせたその飲み物も、ウォルバンの国の飲み物だった。

甘露は喉を潤し、声の通りが格段に違ってくると言われている。

飲み終わった茶器を、月芳ユエファンの持つ盆に戻すと、月芳がニコリと笑って先を促した。ここからが素敵な部分なのだから、良い声でお話してね、と念を押すのも忘れない。

ウォルバンは、ゆつくりと続けた。

「この国に伝わっている言伝えは、ここで終わっている。しかし、実は、虎はただ逃げ出した訳ではなかったのだ。これは、私が父から聞いた、私の国に伝わるその先の話だ。

人の世を治め始めてしばらくたったある日、ファヌンは一度空に還ることとなった。妻にしばしの別れ告げ、身にまとっていた人の世の服をすべて脱ぎ、身を清めて、初めて降り立った山へと向かった。山の頂上まであともう少しと言うところで、ファヌンは洞窟を見つけた。

そこは、かつて、虎と熊とが、日の光を避けながら100日を過ごした場所であった。よく見ると、入り口は左右が深くえぐられ、避けている。無数に走る溝は、獣の爪痕のようにも思えた。4本の爪痕、そして5本の爪痕——ああ、これは恐らく空腹に耐え切れずに、虎と熊とがたててしまったものなのだろうと、ファヌンは思った。と、向こうから、よろよると何かが歩いてくる姿が見える。両の腕が押さえている頬からは、鮮血が止めどなく溢れている。よく見れば、後ろ半身は毛に覆われ、前の半身はまばゆく白い女の身体だ。背面を覆う毛にも、血がこびりついては居たが、それは、かつての縞模様をとどめていた。

ファヌンの前に、どうとくずおれると、虎は言った。

『申し…わ…けありません、あと1日でしたが、私は…我慢できずに…背中に日の光を浴びてしまいました…。少しずつ、人になっていったのに…申し訳、ありません…折角…』

言いながら、ファヌンを見上げ、熊妹はどうしましたかと聞く。熊はヤンヒヤンという名を与えられ、我が妻となり、今は息子と人の世を治めているのだとファヌンが応えると、虎の目から涙が滂沱として流れた。

そう、そう、よかった、と押し出すように呟く。

その傷はどうしたのだと問うファヌンに、虎は、ほんの少し目を閉じて、そして、答えた。

『実は、あと1日というところで、腹が減って腹が減って、自分で爪を立ててしまいました。』

恥ずかしそうに、爪の折れてしまった両の手を隠した。

ファヌンは、虎の顔をじっと眺めた。妻である熊…ヤンヒヤンの明るい太陽のような美貌とはまるで違うが、暖かな月の思慮深さに満ちた美しい顔に、5筋の川のように刻み込まれた傷跡から、未だ乾かぬ血が溢れ流れ出している。

ファヌンはその傷を見てすべてを悟った。

洞穴にある4本の…爪痕――。

背中だけ、獣のままの、美しい娘――。

ファヌンがそつと傷跡に触れると、瞬く間に血が止まった。背をなでると、ゴワゴワした毛が滑るような白い肌に変わっていく。腕の後ろに手を這わせて、爪の折れた4本の指を順になでてやり、裏側にある隠れて普段は見えない1本も丁寧になぞると、虎はついにすばらしく白い肌をもつ女性となった。最後に、もう一度頬の傷跡に触れたが、そこはついにふさがることには無かった。

構わないかと問うファヌンに、ありがとうございます、と虎は答えた。ファヌンは虎に、ウォリヤンという名を与え、自分と一緒に、空にゆくかと聞いたが、ファヌン様はいずれヤンヒヤンの元に戻ら

れる御身である以上、自分がついて行くわけには参りませんと、ウオリヤンはこれを拒んだ。せめて国に来ないかと問うファヌンに、ウオリヤンは、ただ、一言、いいえ、と、それだけ答えた。

己のこの傷を見れば、聡いヤンヒヤンはすべてに気づいてしまいうるうから、と。

そこで、ファヌンは、山の向こうに住む若者と夫婦になるよう言い残して、空へと還った。

人となったウオリヤンが、ファヌンの言葉の通り山を越えると、そこには小さな小さな国があった。ウオリヤンは、その国の王と結ばれ、子をなしたが、頬に五筋の傷を持つ王妃の話が人々の口から口へと伝えられて山の向こうにいる大切なヤンヒヤンに伝わることを恐れて、ある日、いずことなく姿を消したという」

一気に話し終わると、ウオルバンは、月芳の様子をうかがった。

月芳は、少し眉を寄せて困ったような泣きそうな顔をしたが、すぐに笑って言った。

「優しい虎なのね、ウオリヤンは」

ウオルバンも、満足そうに、にっこり笑う。

この話は、ひどくわかりにくいのに、月芳は、初めて聞いた時からきちんとその内容を理解して泣いたのだ。

ウオリヤンは優しすぎる、可哀想だと。ただ大切に守られているだけのヤンヒヤンが許せないと、まだ幼い月芳に泣かれ、同じくらいに小さかったウオルバンは、しどろもどろになりながら、ウオリヤンはヤンヒヤンが好きだったから知られたくなかったのだ、大切な妹のヤンヒヤンに幸せになって欲しかったのだと、懸命にあやしたものだ。そういうと、ヤンヒヤンはずるい、と、月芳は、また盛大に泣いたのだが。

そんな、遠い昔を思い出しながら、今ではすっかり大人びた月芳を眺め、少しだけこぼれていた涙を拭いてやった。

第1章3

「ありがとう…。そうだ、ウォルバン、一度聞いてみたかったの」
「うん？」

「あなたの国でも、名前には、由来があるのでしょ？」

「ああ。この国と、同じように」

「ヤンヒャンとウォリヤンには、どういう由来があるの？」

「ヤンヒャンは…伝説では、太陽のような美しさを持つ女性であったという。美しく明るく匂い立つ太陽、太陽の香り、という意味の名前がヤンヒャンだ」

「綺麗な名前ね…ウォリヤンは？」

「ウォリヤンは、控えめに微笑む月のような美しさを表す、月の香り、という意味」

「月の香り、それじゃあ」

「そう、『月芳』^{「ユエファン」}という名前と、同じ。月のような優しい芳しさと美しさ」

「でも、私は、この名前は嫌いよ。『ウォリヤン』は、とても素敵な名前だと思うけれど、『月芳』は嫌い…。私には似合わない…名前…」

君にとっても似合っている、と続けようとしたウォルバンの言葉を遮るように、首を振って月芳が吐き出す。

びく、と、一瞬だけ、ウォルバンの瞼が震えたが、すぐさまそれを押し隠し、につこりと笑って言った。

「私は、月芳と呼ぶのが好きなんだが…それも、嫌？」

「…いいえ…。ウォルバンに呼ばれるのだけは、好きよ。ウォルバンが呼ぶときは、私の名前だわ」

言って、月芳は、うつむいた。

「ヤンヒャンは、ウォリヤンの名前を知っていたのかしら。ウォリヤンがどうなったのか、ヤンヒャンは 知らないままなのよね、ず

つと。知らないまま、幸せなのね…」

呟く月芳の言葉が、ほんの少し、苛む調子を含んでいたことにウォルバンは気づいたが、何も答えずにいると、お茶にしましようとして月芳は茶器の用意を始めてしまった。

差したばかりの簪が、動くに任せて、月芳の髪の上でしゃらとゆれる。

お茶が済めば、午後の講義の為に、教師がこの部屋にやってくることになっている。その前に月芳の髪を結び直してやらねばなるまい。少女から少年へと変わるために。

本来であれば、少女である月芳はそのままの姿でも構わないのに。知らない方がいいこともあるのだ。この聡い少女は、知らないで良いことに気づいてしまつて抜け出せないでいる。

たとえば、世継ぎを望む人々の声を。
強く賢い王子を求める、民草の願いを。

知らない方がいいことも、あるのだ。

少なくとも、それにとらわれて、動けなくなってしまうことがわかつているなら。

姿を隠したウォリヤンはきつと、そのことを知っていたのだろう。頬がぞわりとうずくように痛む。

ウォルバンは月芳に気づかれないように、小さく一つ、息をついた。

お茶の時間はあっという間に終わり、わずかに残った時間で、ウォルバンは月芳の髪を結び直し、簪の替わりに小さな冠を乗せ、とめる。

鏡に映っている少年に見える己の姿をのぞき込んで、満足げに月芳はほほえんで言った。

「ありがとう、後は1人で出来るから。ウォルバンも、午後は訓練

だろう？ 気をつけていつてくるといい」

月芳は姿の変化と同時に、言葉遣いも少年のものへと戻る。そして、なれた手つきで布を使い顔全体を覆った。目だけを出してあとはきれいに隠す。

「ああ、では。また明日、だな」

「ああ、また明日、ここで」

ウォルバンは軽く手を挙げて室を下がり、ぱたん、と扉を重ね合わせた。かすかに、衣擦れの音が聞こえる。もう、すっかり少年の姿になっているであろう月芳を思い浮かべて、ウォルバンは、また、一つ、息をついて、訓練場へと向かった。

第2章

「これはこれは、ゆっくりのお越しで」

訓練場でかけられた言葉に、ウォルバンは少しばかり目をやったが、そのままついと視線を戻す。

「まあ、あなたにとっては、訓練も、遊学の一環にすぎませんからねえ」

「さすが、お気に入りとは違うねえ」

「おいおい、隣国の王子様だぞ。その言い方は、失礼つてもんだろ……」

「王子様、こちらの国はお気に召しましたか。遊学にいらっしゃったはずが、すっかり馴染んだご様子で……」

「毎日の訓練ですっかり灼けてしまつて……ああ、これは、もともとでしたか、失礼」

音だけは上品な笑い声と共にウォルバンに向かってかけられる言葉には、嘲りと揶揄が満ち、ほんの少しの羨望も混じっている。

毎日毎日、飽きもせず、同じような言葉をかけてくる貴族の子弟たちには、心底辟易していた。

ろくに訓練もせず、剣も使えず、矢の番え方すら知らぬくせに、何かというと、ウォルバンを「遊学」「特別待遇」と貶める。

何も、知らないくせに。

王子付きの隣国の王子。

小さな小さな山間の国がこの大きな国に攻め込まれないでいるために送った「友好の証し」としては、破格の扱いだろう。「友好」が続く限り、国と国との間の平和は守られる。

「特別待遇」を揶揄される度に、ウォルバンは、自分の存在する意味を思い知らされるのだ。初めてこの地につき、冷厳王……月芳の父に相對した時、はつきりと告げられた言葉の意味するところを。

「友好は、お前の命の限りだ」

命の限り。

王子付きの自分は、王子に何かがあっても、生きては居られまい。王子の傍仕えは、次の王となるべき存在を守り抜くことが仕事なのだ。

それは、つまり、次に自分を縛る存在を、自分で守ることに他ならないのだとしても。

とうに国に帰ることはあきらめている。

いくら守ってみたところで、自分が国に帰れなければ、王に連なる者はおらず、国がどうなるかはわからない。それでも。

もうおぼろげにしか思い出せなくなってきた小さな国のために、ウォルバンにできることといえば、出来るだけ、長く長く、「友好の証し」でありつづけることだけだった。

国に住む人々と…最後までウォルバンを手放すことを拒み続けたが、ついに民を取らざるを得なかった父であるホラン王のために。

ウォルバンは、すっかり手に馴染んだ剣の柄を握りしめると、鋭く振り下ろし、訓練を始める。

未だぴーぴーとうるさい子弟たちが目の端に映る。先刻、笑顔で大丈夫と笑った月芳と同年代の彼らのその無知さ加減にいつになく腹立たしさを感じたが、無視を決め込んで、剣を振る。

慣れたこと、慣れたことなのだから…だが。

「…まあ、あの“姫様”にはお似合いだろう」

その言葉は、聞き逃せなかった。

「…姫ではなく、王子だ」

「なに？」

「…あの方は、王子だ」

「王子！ あれが王子様！ 城の奥に閉じこもってめったに出てこ

ない、まるで深窓の姫のようなあれが？」

「だまれ」

「おい、聞いたか、このウォルバン王子は、男女の別もつかないらしい」

「月芳様、などと男名を付けられても、王子らしいことなど何一つできないというウワサの“姫様”なのにな」

なんと馬鹿なことを、と嘲笑と侮蔑の視線が注ぐ。

何も、知らないくせに。

さつきよりも、強く胸の中で呟く。表に出たくとも出ることを制限されており、出るわけにはいかない。

王子を望む人々の声を知るからこそ、姿を現すことはないのだ。ほかに、選ぶようもない。年を重ねれば重ねるほど、緩やかに丸みを帯びる体は、人々の望む姿とはほど遠いと、月芳自身が誰よりも感じているのだ。

そんな少女の胸の裡の、ほんのわずかでも、この男たちが知っていたら。

そうしたら、そんな言葉など絶対に出てくることなどないであろうに。

ウォルバンにとっては、生き抜くために守ることを余儀なくされただけの月芳であったが、目の前で一人悩みを包み隠そうとしている姿を毎日見て過ごしてきたのだ。

何も感じないでは居られなかった。知らないで居れば、よかったが、ウォルバンは知ってしまったから。

わからぬ者に対しての憤りは、ぶつけどころもなく。

ウォルバンは、ただ、「王の御子なのだから、間違いなく王子だ」と低く絞り出すように言くと、目の前の馬鹿どもの笑いを断ち切るかのように、素振りを再開した。

いつか、本当にこの声を断ち切って、誰にも、もちろん、月芳に

も、届かぬようにしてやろうと思う。

聡明で優しい月芳が、当たり前前に簪を差して王の傍に立てるように、悩みの元を断ち切ってやろう。

「友好の証し」であることは国を守る手段だけれど、孤独なはずの「友好の証し」としての自分に、居るべき場所を与えてくれた月芳のために、ただの飾りではない友好を、それ以上の親愛を、返せるものならば返したい。

そのためには己が強くある必要がある。身も心も――。

素振りの音は、日が落ちて、星がいくつか瞬いても、止むことはなかった。

第3章1

「秋になったら、一緒に紅葉を見に行きましょう」と月芳が言い出したのは、夏の暑さも次第に薄れ始めた、ほんの一月ばかり前のこと。

突然なに、と笑うウォルバンに、秋も突然にきて突然に去っていくのよ、と月芳は答える。^{ユエファン}気がつけば訪れて気がつけば去っている秋はそういう季節なのだという。

ウォルバンと月芳の居る城は、険しい山を後ろに、それよりは少し緩い丘陵の続く山を左右に配した、守りに強いとの評判の城。その中でも、城の背面にそそり立つ峻峰、智偉峰は深い溪谷が幾重にも連なり、その間を縫うように走る川は、豊かな水を湛え、春は翠、夏は濃緑、そして、秋には美しい錦で染め上げられることで有名であった。

城を挟んで向こう側は、切り立った崖になっており、おいそれと人が立ち入ることもできないから、月芳の身に危険も少なからうとウォルバンは、幾度か山に立ち入って、月芳の足でも苦無く歩ける道を探してあった。

谷に錦が敷き詰められたある日、月芳はウォルバンを急かすようにして、智偉峰へと向かった。

秋の陽光は、朱く黄色く色づいた葉の間をくぐり抜けることで、一層穏やかに降り注ぎ、足下に積もった枯れ葉や下草を踏みしめると、いつもとは違う柔らかさを沓越しに感じる事ができる。

ゆっくりと感触を楽しみながらあるく月芳を確認すると、ウォルバン自身もまた、木々を見上げた。

昔々、こんな風にのんびりと、父と共に故郷の山を歩いたおぼろげな記憶を思い出す。父の語ってくれたたくさんのお話には、楽しいもの、悲しいもの、愉快なもの、いろいろな人々の思いが込められていて、幼いウォルバンの心を満たしていったものだった。

「ウォルバン！」

月芳の呼ぶ声に、ハッとして意識を引き戻す。ずいぶんとぼんやりしていたらしい。慌てて、「あまり私から離れないで」と声のする方へと行くと、興奮で頬を赤らめた月芳が、一点を指さして言った。「ウォルバン、見て！ あの洞穴の入り口：爪痕みたいじゃない？ 薄暗くて…ヤンヒヤンやウオリヤンが住んでいた場所も、こんなところだったのかしら」

指された場所は、かなり深い崖の中腹にぽっかりと口を開けた洞穴。

入り口から数メートルは、日が差し込むのか、月芳の言う「爪痕」のような傷も見える。もしかしたら、本当に野の獣が住むのかも知れない。

何かが飛び出しては来ないかと、確認のためにとウォルバンが身乗り出したその時、後ろから、襟を掴んですごい勢いで引き戻された。

そのまま、ドンと、地面に放り出される。

「ウォルバンっ」

駆け寄ろうとする月芳を阻むように、倒れたままのウォルバンの目の前に、数本の足が並んだ。

何故ここに人が、という驚きの一方で、こんなに近寄られるまで気づかなかったことに愕然として、ぼんやりとその足を見つめていたが。

「いやだ、離してくれっ！」

剣を履いた三人の男のうち、一人が月芳の身体を掴むのを見て、すっ、と身体が冷え、直後、熱くなった。

座り込んで、何をしているんだ、自分は。月芳を守らなくては。剣を、握れ。

日々の訓練で幾度となく繰り返した動作は、とっさに身体を動かす。跳ねるように起きあがり、腰から剣を引き抜くと、月芳を掴む男に向かって斬りかかろうと剣を振り上げたが、前に立つ二人が、

簡単にその道をふさいでしまう。

振り下ろした剣を跳ね返され、枯れ草の上に身体ごと転がったウォルバンは、すぐにまた跳ね起きると、もう一度、三人の方へ向かって走った。

月芳を抱えた男をかばうように、二人の男は、両方からウォルバンに向かって剣を構える。

また、はじき返される…ならば。

素早く剣を脇に抱え、反動をつけて地面に身を落とした。

目の前で沈み込んだウォルバンの身体を、男たちは一瞬見失う。

そのまま、良く乾いて摩擦の小さくなった枯れ草と落ち葉の上を滑るようにして、足からつつこんだ。二人の男の間をすり抜け、月芳を捕らえる男の足に自分の足をぶつける。

「うぐっ…」

思わぬところに衝撃を受けて、男の身体が大きく傾いた。拘束する力がゆるんだのを悟って、月芳は身をよじり、男の手を抜け出す。他の二人が動き出す前に跳ね起きたウォルバンは、右手で脇に挟んだ剣を抜き出して構え、左手で月芳を背にかばって男たちをぎりと睨み付けた。

一対三…月芳をかばって、守りきれんだろうか。

崖を抜けて敵は来ないと甘く見ていた自分を心底怒鳴ってやりたかった。

剣を握る手に汗が滲む。後ろで、きゅ、と月芳が衣を掴んだのがわかった。

緊張の汗が、額から目に流れ込んで痛む。男たちの動く気配がして、剣を握り直して枯れ葉を踏みしめた。

しかし、男たちが斬りかかってくる様子はない。代わりに、男たちの後ろから、低く響く声がした。

「よい。退け」

さっ、と三人の男が剣を納めると、いくつかの足音を伴って、ゆったりと、その男はウォルバンの目の前に歩いてきた。

「冷徹王……」
「父上」

第3章2

ユエファン
月芳の口からも声が漏れたが、そちらを見る前に、王は手を振り上げ、ウォルバンの左の頬を殴り飛ばした。それほど背は高くないが、良く鍛えられ、屈強な筋肉に覆われた腕から放たれる一撃に、ウォルバンの身体が軽く吹っ飛ぶ。

まだ衣を掴んだままだった月芳は、「きゃ」と声を上げて手を離し、おろおろと、ウォルバンと父を順に見比べる。

転がったままのウォルバンの襟首を掴んで強引に引き起こすと、冷蔵王は、ウォルバンの目に自らの目を合わせ、言った。

「忘れたのか？ 『命の限り』と言っただろう？」

答える言葉を、ウォルバンは持たなかった。

「崖の向こうから敵は来ない。だが、崖のこちら側からは……」
す、と城を指して冷蔵王は言う。

「敵が来ないともいうのか？」

冷蔵王の目は、睨むでもなく、蔑むでもないが、浅はかな行動に怒りを覚えているようだ。大切な、月芳の身を危険にさらしたウォルバンへの。

「申し訳……ありません」

襟を掴まれたままで、ひどく息がしにくい喉から、声を絞り出す。このまま、襟を絞められれば、命の「限り」が来てしまいそうだった。

「父上、やめてください！、ウォルバンが、ウォルバンが、息が出来ずに死んでしまう！私が連れ出したんです。私が紅葉をみたいと言って……ウォルバンのせいではないのです、父上……父上！」

ふ、と襟がゆるんだ。引き起こされたのと同じくらいあっけなく、襟を離され、解放されて、ウォルバンは激しく咳き込んだ。ひゅうひゅうとなる喉から、空気が大量に入ってきて苦しい。

「あまり、失望させるな」

咳の止まらないウォルバンを見下ろし、冷厳王はその一言だけを
残して立ち去った。

後に残されたウォルバンに、月芳が駆け寄って、背中をさすりな
がら、幾度も幾度も謝った。

「ごめんなさい…ごめんなさい…私が、紅葉が見たいと言ったから
……。痛かったでしょう…父上があんなこと…本当に、ごめんなさ
い…。私のせいで……」

ぱたぱたと涙がウォルバンの背中に落ち、丸く滲みていく。

まだ溢れようとする咳を飲み込み、ウォルバンは月芳を見て微笑
んだ。

「謝らないで、月芳。大丈夫だ。ごめん、君も怖かっただろう？
きちんと守ってあげられなくて、冷厳王の大切な大切な子を危険な
目に遭わせて…王が怒るのは当然だよ。この環境を甘く見ていた
私自身の無能さに、自分でも腹が立つくらいだ」

「それは、私が言っただからで……」

「それは違う、月芳。ここを選んだのは私だ。この山は、後ろが切
り立っているから、敵は攻めて来れないと、安全だと思ったが、考
えが浅かった。いつもあの城にいて、少し考えればわかりそうなも
のだったのに。王は、わかっていたのだろうね。気をつけると、警
告してくださったんだよ。あれは——王の傍仕えの三人だったのだ
な」

襲ってきた三人の顔を思い浮かべると、確かにどこかで見たよう
な気もするのだ。時折、冷厳王に呼び出され、状況を聞かれる。そ
のときに傍にいた者だったかもしれない。

月芳が不思議そうに、少し困ったような顔をして自分を見ている
ことに気づき、ウォルバンは続けた。

「きつと、王は、私が君の友にふさわしいか、試したかったのだろ
うね。君の傍にいて、君を守る程の力量になったのか。『遊学』
の効果を知りたかったんだろう」

もともと、残念ながら落第のようだけど、と、付け加えると、座

り込んだままの月芳の手を取って歩きだした。

「ウォルバン」

小さい小さい声で、月芳が呼ぶ。

「ん？」

「国に……帰り……たい？」

不安そうに月芳が聞くので、「いや、傍にいたい」とウォルバンは答えた。

帰りたくないのか、と言われれば、帰りたい気持ちは強い。父を支え、国を豊かで明るいものにするために力を尽くしたかった。断片的に思い出す国は、どこもかしこも美しかった。ウォリヤンの子どもの子どもの、そのまた子どもたちが暮らす国。

「ウォルバン？」

「私はね、月芳。君の傍で、君の友達でいたいから帰らない」

俯いて、嬉しい、と聞き取れないほど小さい声で呟いて、月芳はウォルバンの土にまみれた服の裾を握りしめて泣いた。

土と擦り傷からにじみ出た血で汚れた右手を、ごしごしとお尻の部分に擦りつけてから、ウォルバンは俯いたままの月芳の頭をぽんぽん、と叩いて言った。

「次は、怒られないように、頑張ろうと思う。一緒に、ね」
国を思う切なさ、胸に深く付けられた傷から流れ出す。

その傷を付けた男は、確かに月芳の父親だけれど。

知らない方が、良いこともある。——自分のこの想いは知られてはならない。

ウォリヤンも、きっと、そう言はずだと、ウォルバンは思った。

第4章1

その秋の一件以来、ウォルバンは、前にもまして訓練に精を出すようになっていた。

もつと強くあらねば。

一人二人ならなんとかなくても、また同じように複数で襲って来られたら……。月芳ユエファンを守りきれるとは言い難かった。

まだ、身体が完全に大人になってはならず、筋力も弱いことを、ウォルバンは自覚していたし、貴族相手の軽い訓練程度では到底足りないことにも気づいたのだ。

積極的に軍部の訓練にも参加するようになった。

同時に、この先もずっと月芳の傍に仕えることを考えて、学問の時間も増やすことにした。幸い、「遊学中」という表の身分は、月芳と共に学ぶ機会を与えてくれた。

色づいた葉が落ち、いつもの年よりもずっと多く降った雪に溪谷も崖も白く覆われ、またそれが緩み……。時は確実に、しかし、淡々と変わりなく流れていくかに思われた。

それは、突然のことだった。

10日ほど前から軍部はやけに騒がしく、北と西の守りを固める部隊が、幾隊も城を出て行った。

時折、こんな風に部隊が出動することがある。それは、いつも遠くで戦が有ったときで、勢いに乗った敵が万が一にも智偉峰を越えて攻めてくることがないように、守りを厚くするためのものだった。もつとも、一度として、智偉峰を越えてきた敵はいないのだが。

ここしばらく、軍部での訓練は開かれて居なかった。訓練をあきらめ、前に折ってしまった予備の剣を抱えて換えのある倉庫に向かう途中、貴族の訓練場を通りがかったウォルバンの肩に、こつんと石が当たった。

どこから？と見渡すと、20歩ほど離れた訓練場の柵の上に、4人の貴族の子弟が座って、こちらをニヤニヤ眺めていた。

無視して歩き出そうとしたところに、また一つ、石が飛んでくる。今度は、胸の前でそれを受け止めると、ウォルバンは石を投げた主を睨んだ。

「なんのつもりだ」

「いや、あんたにさ、忠告しておこうと思ってね、王子様」

言って、周りと目を見交わし、クツクツと笑う。貴族らしからぬ妙に下卑て気に障る笑い方だった。

要らぬ世話だと立ち去ろうとしたところへ、聞けよ、ともう一石。「そんなことばかりしているとダメになるぜ？」

「…なんの話だ」

「たまには、国に帰ってみろって話。それとも、“姫様”の傍がそんなにイイのか？」

にやり、と笑われて、気がついた時には受け止めた石を投げ返していた。

「あつぶなあいなあ。ほんのことを言われて怒るのはないんじゃないの？兎に角さ」

忠告はしてやったからな、と一団は立ち去った。

後に残され、なんともいえないもやもやした気持ちを抱いたまま、倉庫に折れた剣を投げ込んだ。

「帰れるもんなら、とつくに帰っているさ」

帰れないから、いるんじゃないか。

新しい剣を取り出して、鞘に収めてからも、気持ちは静まらなかった。

ダメになる？ 何が？ 誰が？

首を振って、考えを振り払うと、月芳の室に向かった。

日が少しずつ長くなってきたので、月芳は夜の時間にも自主的に

学問の時間を取っていた。彼女が知りたいと言っているので、ウォルバンが自分の国の言葉と文化を教えているのだ。

北の智偉峰を挟んで隣り合わせの国なので、風土や土地環境は似ているが、文化はずいぶんと違うのねと、月芳は嬉しそうに笑って、少しずつだが確実に吸収している。

ウォルバンにとっても、離れている国を思い出す数少ない、大切な時間であった。

第4章2

とんとん、と扉を叩くが中から返事がない。

居ないのだろうか、と、帰りかけた時、かちり、とうちから扉の開く音がした。

灯りのないうす暗い室に入ると、パタン、と扉が閉められる。

ウォルバンが月明かりを頼りに、灯りに火をともして卓子に置いて、まだ、月芳は扉の傍にぼんやりと佇んだままだったので、手を引いて、椅子に座らせ、自分も向かいに腰をかける。

「どうした？ 何かあったのか？」

明らかに様子がおかしい月芳に、ウォルバンが問いかけても、すと目をそらしてしまう。

「何もないわ……」

「ウソだろ。何もなくて、そんなに君がぼーっとするはずがない。話して」

肩を掴んで背けた顔ごと、無理矢理こちらを向かせて目を合わせる。

「痛い、から、離して……」

「話すんだ、月芳」

月芳にドン、と胸を叩かれたが、ウォルバンは肩を掴んだ手を緩めない。

しばらく、月芳はもそもそと動いていたが、あきらめたように口を開いた。だが、視線は、ウォルバンの目からはずされる。

「今朝、北の守りをしていた部隊の兵士が、帰ってきたって、先生が。北の……智偉峰をで戦があつて……でも、打ち破って、たくさんの捕虜と一緒に……きやあつ」

肩を掴んでいた手が急に離れて、バランスを崩した月芳が、小さく悲鳴を上げて、卓子に手をついた。

がたん、と椅子の倒れる音がして、ウォルバンが今にも部屋から

飛び出そうとするのが目に入った。

ウォルバンが、出て行く…いや、と月芳は呼び止める。

「行っちゃだめ。ここにいて！」

わずかに足を止めて、ウォルバンは振り返った。悲しそうに月芳を見て言う。

「まだ間に合う。智偉峰の向こうで、私を待っているんだ、父が。」

ごめん、月芳。遊学は…終わらないといけなけれど、また、すぐ戻ってくるから…」

だめ、だめ、と言う月芳を置いて、部屋を出ようとしたウォルバンに、月芳は耐えきれずに叫んだ。

「だめよ、ここにいないくちや！ ウォルバン、あなたは『友好の証し』なんですよ！ それに今行ってももう遅いわ！ それにあなたはあちらではなく、こちらの…この国の人間なのだから！」

言ってから、月芳はハツとして口を押さえるが、すでに言葉は放たれた後で、ウォルバンの耳に入りその足を止めさせるには十分だった。

青ざめて唇を隠す手が、哀れなほど小刻みに震えているのが目に映る。

ウォルバンは目を見開いた。

「どういうことだ、月芳！」

「…お父様」

「え？」

「お父様が言ったわ。ウォルバンは、帰さないって」

「冷厳…王が？」

「そつよ、お父様が言ったの！ ウォルバンは『友好の証し』だから帰さない、このまま、この国で私の傍で育てて、大きくなったら…」

そこで言葉を切って、月芳は唇を震わせた。みるみるうちに、目に涙の粒が浮き上がる。声が震えないように、身体を抱きしめて涙をこらえようとする月芳の言葉を、ウォルバンは引き継ぐとして

言った。

「君とずっと一緒にいて、『友好の証し』として一生仕えろって？」
かすかに、月芳の首が振られる。

「——大きくなったら…あなたが、次の王になるのだって
すう、と、涙が一筋こぼれ落ちた。

「な……に？」

「あなたが、王になるの。あなたは、最初からそのためにここに来たのよ……」

何を——言っているんだ、一体。

誰が何になるって？ 最初から？

言葉は頭に入ってくるのに、全く理解が追いつかない。

「ホラン王の……父の後を継ぐのか？」

思わず確認すると、また、月芳の首が振られた。

「違うわ。『ここ』の王。冷厳王の次の王よ」

「それは月芳だろう。私は関係がないじゃないか」

「だから、『あなた』なのよ、ウォルバンツ！」

第4章3

キン、と耳に突き刺さるほどに鋭い、それは、悲鳴のような声だった。

「——知ってる？ 『友好の証し』は、父上が言い出したことじゃないわ…始めたのは、ホラン王よ」

「父が？」

「そうよ。最初言い出したのは、ホラン王。最初の『友好の証し』は…」

「月芳、なんの話をして居るんだ？ 最初って…私の前にも居たのか？ 誰か来ていたのか？」

「来てたんじゃなくて、行ったのよ…。連れて行ったの。ホラン王が。まだ、この国の方が小さかったから、『友好の証し』として…父上から…奪って…。けれど…この国は力をつけたわ。だから…奪い返したのよ」

なん…だって？

「嘘だ」

「嘘じゃないわ！」

月芳は言い放った。まだ瞳に大きな涙をためたままで。

沈黙が、息苦しい。

「そんな話は聞いたことがない…」

「そうだろうな」

不意に、低く重い声が部屋に満ちた。音もなく、静かに部屋に入ってきたのは——

「冷厳王…月芳に何を言っただんだ？」

「口の利き方がなっていないな、ウォルバン」

「答える」

ぎっ、と睨み付けるウォルバンに、冷厳王は表情も変えずに言った。

「なに？」

「私が、憎いだろう？ どっちだ？ 国から引き離れたことか？
月芳に真実を告げたことか？」

「どっちもだ！」

「どっちも、か。子に憎まれるのは、存外苦しいな」

冷厳王の目はウォルバンの向こうの扉を見ている。なのに、その言葉はウォルバンに向けられたものだ。

「子ども扱いは……」

「仕方有るまい。お前は子だ」

だから子ども扱いはやめると、言おうとした。しただが、上手く行かなかった。何か、違う。そういう話をしているのではない。この、目の前の男はそんな話をしているのではない。子ども扱いしている訳ではなくて……。

ゆつくりと、言葉が頭の中にしみこんで、それまでの話と手をつないでいく。

「だから、言ったでしょう……。嘘じゃないって……」

それまで黙って話を聞いていた月芳が、ウォルバンの手を取って、そのまま自分の頬にあてる。くすみの一つもない、滑らかな頬をすり寄せながら言った。

「最初の『友好の証し』も、やっぱり、あなた。二人生まれた子の一人、次の王になる資格のある、男の子。私の兄さん—— あなたが『月芳』なの。」

掌が、濡れて、冷たい。

泣かないで欲しいのに、とウォルバンは思う。自分にこの話をするの、どうして月芳なんだろう。

第4章4

「私が…ここに来たときから知っていたのか？」

おそろおそろ尋ねる。

「ううん、ウォルバン、あなたが来る少し前…。父上が言ったわ。

兄さんをいつか取り戻すから、その場所を作っているんだって。側近の人たちは事情を知っているからよいけれど、何も知らない貴族や国民はそうはいかないから、『月芳』^{ユエファン}という王子が城にいて、次の王になるという話が、人々の耳に入るようにしているって。それはうまくいつている。だから、お前はこれからもその日が来るまで『月芳』として生きろって……。入れ替わった後、事情を知らない者たちが不審に思わぬよう、顔を隠して…王子の存在を……」

最後の方は、声が震えて聞こえなかった。

「それなら、もっと早くに、私が来たときにそういえばよかったのに…じゃあ、ずっと、月芳は、自分の名前じゃない名前を使ってきたっていうのか!？」

「言えば、お前は聞いたのか？」

冷蔵王の声がした。

「『ホランがお前を人質として連れて行ったあげくに、自分の息子として育てていたのを、私を取り戻したのだ。さあ、国を継ぐんだ。』そういったら、お前は、聞いたのか？」

淡々と、感情を感じさせない声で聞かれて、ウォルバンは答えに詰まった。

ここに來てからのことを思い出す。月芳と過ごした時間は、とても幸せだったけれど、国のことを思わない日はなかった。一生帰れないとわかっていても、父も、国も、恋しかった。国のためだから、我慢できただけだ。

「——私は、継ぐ気はない」

冷蔵王の表情は変わらない。予期した答えのまんまだったからだ

ろう。

多分、それは告げても同じだと判断した最初の頃から、ずっと変わらないうちで感じていた答えだったから。

それでも。

「だが、国はない」

「——！」

「もう、『友好の証し』は必要なくなった。お前も真実を知った。もうお前はここで生きるしかない。ここにいるんだ……月芳」

「それは、私じゃない」

「おまえだよ、月芳。芳しい月の子。『ウォルバン』もそういう意味の名だろう。ホランにしては、良い名を付けた……月芳、お前のために残しておいた名だ。そして、場所だ」

かすかに、愛しそうに、冷厳王がその名前を呼ぶのが気持ち悪かった。その声が自分に向けられているのが。

「違う！それは月芳だ。月芳、月芳っ」

部屋の中にいる、その名の主を呼んで振り向く。

「逢月よ、月芳兄さん……」

「——……」

「本当は……もっと笑って、名前、返そうと思っていたの。ごめんなさい、兄さん……」

泣き笑いのような顔で、月芳と呼ばれていた少女は言った。

「ゆ……逢月……」

かける言葉がない。抱きしめたら良いのか、離れたらいいのか、わからなかった。

ただ、泣きながら笑う少女の顔は、自分がさせたのだということだけ、はっきりとわかった。

ゆるゆると、立ち上がって扉に向かう。

「行っても、もう無駄だ」

さっきの愛おしさのかけらも滲ませず、冷厳王の声はどこまでも冷たい。そのことがたまらなく厭わしかった。

「それでも、ここには居たくない……あんたは、最悪の父親だ。逢月の」

扉から出ても、今度は誰も止めるものはなかった。

ただ、閉まりかけた扉の隙間から、「そうかも、しれん」と、ひどく気の抜けた冷徹王の声が聞こえた。

——国に、帰らなくては。

第5章

記憶の中で、おぼろげに、でも美しかった国。小さいけれど、光に溢れていた国。

目の前のこの場所には城があつたはずなのに、あるのは瓦礫ばかり。人と、馬と、駱駝と車輪に踏み荒らされた形跡が、そこで何が起こつたのかを教えてくれる。ぞつとした。

こんなことがすぐ隣りで起こつていたのに、自分は知らずに居たのだ。自分だけが全てを背負つて守っている氣になつている自分のすぐそばで、祖国が――消えようとしていたのに。

待つてくれと叫びたかつた。最後にここを見た時、幼いながらもきつと二度と祖国を見ることはないと思つたけれど、それはこういう意味ではなかつたはずだ。

この身で、国を買つたはずだつた。

一体、どこで読み間違つたというのか…。

『こちら側からは、敵が来ないとでもいうのか？』

ぎり、と齒がなつた。

「友好の証し」なんてまやかしに過ぎない。祖国を出ていては、防ぎようもない。

結果的に、何も知らないままに「友好の証し」という言葉に守られたのは、自分一人だつた。

「友好の証し」という名前で包まれた、甘く柔らかい嘘の寢床で、ぬくぬくと、自己犠牲の夢を見ていた。自分だけ。

かくん、と足から力が抜けて、ウォルバンはその場に膝をついた。立ち上がれないほどに、疲れていた。

守っているはずだつた。

ウォリヤンのように。

王の息子を入質に自分たちの命が守られていることを知らないままの民と国を、守り続けるはずだった。

男でも女でも、月芳が王の子である自分自身を誇りに思っ、ゆくゆくは王となることができるように、守り続けるはずだったのだ。ウォリヤンの話をしながら、己はまるでウォリヤンのようだと、自分でも少し満足すら感じていたのだ。

何も、知らないくせに。

いつか、貴族の子弟を蔑むようにして呟いた言葉が、鋭く自分の胸に刺さり、身体が冷える。

知らなかったのは、自分の方だ。

訓練の間に、幾度も兵士たちが守りを固めに旅立っていったのを見ていたんじゃないかったか？

思い出せば、いつもウォリヤンとヤンヒヤンの話をした後、かすかにヤンヒヤンを責めるような言葉を、月芳は漏らしていなかったか？

あれは、月芳自身に対する周りの態度に向けられているのだとずっと思っていたけれど。

月芳という名前は嫌いだと言っていた。

自分には似合わないと言っていた。

そんなことはない、良い名前だと、自分は言わなかったか？とても美しい名前だと。

その言葉を、月芳がどういう気持ちで聞いていたのかと思うと、目の前が薄く曇っていく。

膝と、両手について、青い草を握りしめたが、ぽたりぽたりと、涙は落ちた。

故郷の山を覆う草は、青く、堅く、天を仰ぎ、地に伏せる度に、妬けた煉瓦の色の頬が切れて、紅い筋が走る。

勢いに任せて、山肌を転がり落ちた。がん、と頭に響く衝撃が走り、ウォルバンは意識を手放した。

第6章

目を開くと、ウォルバンは竹林の中にいた。

竹？と一瞬いぶかる。

智偉峰は大きな森を抱いてはいるが、竹の茂るような場所などあったらどうか。

周りを見回してみても、ざわめく竹の葉音に合わせ、青翠が揺れるばかり。

さわさわ…さわさわ…。

竹が揺れる。誘うように――騒ぐ。

そういえば、とウォルバンは思い出した。

これも言い伝えたが、竹林には、仙人が人の世を避けて住んでいて、なんでも望みを叶えてくれるという。

思い出して、ふ、と笑った。この話も、国にいるときに、父から

…父と慕ったホラン王から聞いたのだった。

ずっと小さいころ。まだ何も、知らなかった頃に。

「仙人、いるんだろう、仙人」

ウォルバンの声は、竹林を渡る風に絡め取られ、くるくるとその場を舞う。

「願いを叶えてくれ」

大切に守ってきた月芳の笑顔。最後に見た、月芳の困ったような泣き笑いの顔。

他の望みは、考えられなかった。

「逢月に、全部返してくれ。私が奪ったもの、全部…」

何も知らずに、ウォリヤンになった気でいた。でもウォリヤンならば、もっと、ずっと早く、逢月の苦しみに気づいて姿を消しただらうに。

呼べど、叫べど、応えはない。

竹はざわざわ騒ぐだけで、何一つ、代わりはしなかった。

一瞬、ざわ、とひとときわ大きく竹がざわめき、大きく傾いた竹の間から、薄く光る湖が見えた。駆け寄って、中を覗く。

灼けた煉瓦色の肌、黒く堅い髪、真つ黒の瞳…。頬に、幾筋が走る傷は、草で切ったのだらう。

そんなところだけが、ウォリヤンみたいで、可笑しかった。

ウォリヤンだったら…。

もう遅い…いや、早いのか。

一瞬だけ、山の麓に目をやって、ウォルバンは、振りかえることなく竹林の奥へと走り去った。

第7章

「お待たせしました：おや？」

雲隠コンインが二胡を手にして湖に戻ったときには、月芳ユエファンは、湖の真ん中に浮かぶ大岩に寝そべって、ぼんやりと月を眺めていた。

だまって、雲隠は二胡を弾きはじめる。

弾きながら、湖に移る月芳を見る。大きな虎の身体に似合わない、頼りないくらいに小さい影は、灼けた煉瓦色の肌に、黒い髪。

雲隠は小さくため息をついた。

初めて訪ねてきた少年は、月芳だと名乗ると、ウォリヤンという虎の話をし、ウォリヤンのようになるまで、ここに置いてくれと言って、強引に山に腰を落着けてしまった。

次第に、背中が腕が脚が毛に覆われ、すっかり虎の姿になった時も、雲隠は別段驚きもなかった。

ここの気に強く影響されると、持ち主が頭に描く自分の姿に引きずられてしまうこともあっておかしくはない。

それは雲隠の力とは関係なく、この場所の持つ特殊な空氣のせい。月の名前を持つのに、満月の晩にはけして月を見に来ることはない。

細って、細って、消える最後の名残の月を、切なそうに見上げる。「月に逢うなら、満月の方がいいのに」と学然はいうけれど、雲隠には月芳の気持ちも分かるような気がするのだ。

多分。

と、雲隠は思う。

彼が満月を見上げる時には、湖に映る彼に会えるだろう。

穏やかに響く旋律に揺れてか、時折、月芳の尻尾が、ふらりと揺れた。

第7章（後書き）

虎「月芳」の過去のお話でした。

このお話のいわば続きが第4話となっています。

この後、第4話も連載を続けていきますので、そちらもどづぞお楽しみくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7664o/>

竹林奇譚 外伝三 想月

2011年1月9日20時26分発行